

## 不思議なドラマ

【聖書】 出エジプト記 2章 1～10節

レビの家の出のある男が同じレビ人の娘をめとった。彼女は身ごもり、男の子を産んだが、その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。しかし、もはや隠しきれなくなったので、パピルスの籠を用意し、アスファルトとピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。その子の姉が遠くに立って、どうなることかと様子を見てみると、そこへ、ファラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を行き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやって取って来させた。開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、「これは、きっと、ヘブライ人の子です」と言った。そのとき、その子の姉がファラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、娘は早速その子の母を連れて来た。王女が、「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」と言ったので、母親はその子を引き取って乳を飲ませ、その子が大きくなると、王女のもとへ連れて行った。その子はこうして、王女の子となった。王女は彼をモーセと名付けて言った。「水の中からわたしが引き上げた(マーシャー)のですから。」

### 【序】 他人を気遣う日本人気質

先週の礼拝説教では、小山禎さんが敗戦体験を証されました。小山さんは北満州の鉄嶺近くの長野県農業開拓団入植地で学校長をしておられたお父さんの許で暮らしていて、小学校1年生の時に敗戦を迎えました。お父さんを亡くし、大変な抑留生活を経験し、翌年6月に帰国されました。そして敗戦後の日本のどん底で成長されたのです。戦後66年、戦争を知らない世代が圧倒的に多くなりました。でも私たちは戦争経験を風化させてはならないと思います。

私は先週の福岡の聖会で、川越ペンクラブの同人誌「武蔵野ペン」に載った在日韓国人の洪栄基(ホン・ヨンキ)さんの文を紹介して、今年の敗戦記念日メッセージを語りました。韓国メディアが報じた東日本大震災での日本人の気質についてです。

「避難所の生活は言い尽くせない不便が伴います。食料・水・物の不足、混乱・病気・寒い寝床・家族の安否・気になる被害状況・目から消えない悪夢と恐怖・明日への不安、まさにパニックの連鎖です。日本人特有の生活文化は他人に迷惑をかけない気遣い——差し出された一杯のうどんをどうぞお先にと隣りの人に勧め、そしてそのうどんが5人先、10人先へと廻されていきます。毛布も一緒にかぶり、横寝をして寝床を譲り合います。給水所やパン配給の長い列にも、我先きにはなく、並んで順番を待ちます。割り込みも、わめきも、怒鳴り声も、争いも起りません。

子どもを亡くした母、高齢の父を亡くした娘が、静かに涙を拭いています。自分だけが家族を亡くしたのではない、自分が泣くと皆さんがもっと悲しむからと気を配り、声無き涙で悲しみをこらえてい

ます。この気遣い文化が、千人、一万人という避難生活の秩序を守っているのです。外国人には度が過ぎているのではと映る日本人の気遣い文化——でもそれは他人を思いやる愛、人間愛です。これがマスメディアを通じて全世界へ伝えられ、世界中の人を感動させ、甦れ、日本！と支援の原動力になっているのではないのでしょうか」

韓国の方たちがこのように日本人を見てくれているのですね。有難いことです。しかし私ははっと気がつきました。現在日本には、一世、二世、三世、四世の在日韓国・朝鮮人が80万人以上暮らして居られます。そして今なお様々な差別・偏見を受けて様々な葛藤を味わっておられるのです。どうしてでしょうか。

敗戦まで35年間、日本が韓国を強制併合し、植民地支配したからです。この時の日本人と韓国・朝鮮人との不平等な立場が、優れている——劣っている、貴い——卑しいという差別意識を日本人の心に植え付け、支配者としての優越感に立って、韓国・朝鮮民族の誇りを数々、傷つけました。そしてその時に植え付けられた差別意識が、私たちの心にいまだにあるからではないのでしょうか。韓国のメディアが感嘆して報道している日本人の他人を気遣う心を、私たちは一番身近な隣人の在日の方々には向けていません。私たちの気遣いは、日本人同士、すなわち身内の倫理でしかないのではないのでしょうか。

8月13日の新聞に、日本軍がアジア、太平洋地域で行なった15年にわたる戦争で犠牲になったアジア諸国の民間人死者数が報じられていました。中国人 1000 万人インドネシア人 400 万人インド人 350 万人ベトナム人 200 万人フィリピン人 111 万人、朝鮮半島人 20 万人ビルマ人 15 万人シンガポール・マレーシア人 10 万人日本人 80 万人(広島長崎 21 万人、沖縄戦 9.4 万人を含む)総計約 2200 万人。朝鮮半島人が少ないのは、日本軍の兵士・軍属として戦死している人が多いからでしょう。

今回の東日本大震災の死者行方不明者は約2万人余です。それでもこれだけの大きな被害を社会全体として受けているのです。としますと民間人死者総数 2200 万人とは、社会全体としては東日本大震災の 1000 倍に相当する大被害を、日本軍がアジア諸国に与えたということになります。この大きな辛さを 1000 回もアジア各地で惹き起こしたのです。何と大きな罪を犯したことでしょうか。私は大震災の被害に直面しつつ、新たな思いで今年の敗戦記念日を迎えました。

## [1] ヘブライ人弾圧のさなかで

さて旧約聖書の学びは、創世記を終えて、出エジプト記に入りました。ヨセフが活躍した時代から 250 年程の年月が過ぎ、時代はガラッと変わっていました。今日の学びでは、聖書教育の教案よりも女性連合の機関誌「世の光」4～5月号の日高嘉彦宣教師の聖書研究の方が示唆に富み、参考になります。

聖書の舞台となった世界では、ノアの大洪水の後、人類はセム系とハム系の人種がそれぞれの

地域に住みついで広がっていきました。エジプトは紀元前 3100 年からハム系の古代王朝の歴史が始まります。この古代王朝 3000 年間に、前 1710 年から 1550 年にかけての約 200 年間だけ、セム系のヒクソス王朝が出現します。彼らは小アジア地方から非セム系人種に追われてエジプトに侵入して、デルタ地帯東部に住み着きました。そしてやがて全エジプトに勢力を拡大して、ハム系エジプト人の支配権を奪ったのです。

セム系人種のヨセフが総理大臣に抜擢されて輝かしい業績をあげたのも、わずか70人余のヤコブ一族がエジプト東部に移住して強大な民族に成長したのも、セム系のヒクソス王朝時代だったからです。ヨセフは大飢饉の中で食料と引換えに農地・農民を国王のものにしてヒクソス王朝の支配権を確立していきました(創世記 47 章)。しかしハム系エジプト人が再び勢力を盛り返し、セム系王朝は駆逐されます。こうして「ヨセフのことを知らない新しい王」のもとで出エジプト記の歴史が始まったのでした。モーセが対決したエジプト王はラメセスⅡ世(前 1290～1224 年)ではないかと言われています。

小アジアから追われて東部地帯に住み着いたセム系住民からヒクソス王朝が出現したのですから、大飢饉を逃れて東のカナンから移住して強大になってきたセム系のイスラエル人を、ハム系王朝が警戒して弾圧し始めたのは歴史の教訓として当然でした。国王はイスラエル人の人口増加を食い止め、弱体化しようとやっきになりました。そして遂に「生まれた男の子は一人残らずナイル川にほうり込め」と命じたのでした。

この時にレビの家にも男の子が誕生しました。3ヶ月間隠して育てましたが、隠しきれなくなりました。パピルスの籠に防水加工してその子を入れ、蓋をしてナイル河の葦の茂みの間に置きました。やがて流されて波間に沈むでしょう。エジプト人に見つかれば、河に沈められる。わにに食われる。しかし万が一の可能性に賭けて、川辺の葦の茂みの間に籠を置いたのでした。

するとそこへ、何と王女が水浴びに下りてきて、籠を見つけたのです。下女に拾わせて開けてみると、男の赤ん坊が泣いています。「これはきっとヘブライ人の子です」。王女は国王の命令を知っていました。この時遠くから見張っていたその子の姉が王女に走り寄って言いました。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか」。「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、娘は早速母を連れて来ました。王女は命じます。「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」。

母親はその子を引き取って乳を飲ませ、その子が大きくなると、王女のもとへ連れて行きました。王女は彼をモーセと名付けました。「水の中からわたしが引き上げた(マーシャ)のですから」。こうしてモーセは 40 年間王宮で育てられ、最高の教育を受けたのでした。

それにしてもエジプトの王女ともあろう人が、父の国王から弾圧され、奴隷のように扱われているヘブライ人の赤ん坊を、どうして自分の子として王宮で育てたのでしょうか。権力者にとって娘は、

王権の拡張と安定のために大きな価値がありました。NHK の大河ドラマ「江」では、織田信長が京都を目指す備えとして妹お市を近江の浅井長政と結婚させ、彼の死後、彼女を重臣柴田勝家の妻にしています。お市の長女の淀は豊臣秀吉の跡継ぎ秀頼の母、三女の江は徳川秀忠の妻。このようにお市は信長、秀吉、家康という戦国時代の最高権力者を結ぶ絆でした。

こうした昔の歴史的背景を考えますと、モーセを引き取ったファラオの王女も、本来なら宮廷の重臣や軍人、あるいは他国の王子に嫁ぐことになっていたはずで、とすれば結婚前の王女が自分の立場や将来をわきまえずに、勝手に他人の子を養子にすること、ましてやヘブライ人の子を養子にするなど、考えられないことです。逆に言えば、この王女にはよくよくの事情があったに違いありません。

日高先生は、この謎を解く鍵として、5節についての次のような解釈を紹介しています。「そこへ、ファラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を行き来していた」。王女は川に下りていて、侍女たちは川岸の道を行き来しています。つまり侍女たちは王女から離れた位置に居て、しかもじっと王女を見守るのではなく、川岸の道を行き来しているのです。王女の傍近くにいつも侍っているのが侍女の務めではないでしょうか。そこで王女の身体に何らかの病か瑕があり、侍女たちはそれを見ることをはばかっていたのではないかというのです。もしそうなら、王女たちに期待されていた結婚の道が、彼女には閉ざされていたので、養子をもらって育てようとした理由も理解できます。それにしても何故、ヘブライ人の子を養子にしたのでしょうか。

「開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、『これは、きっと、ヘブライ人の子です』と言った」(6節)。この言葉から王女が、ヘブライ人が虐待され、嫌われ、奴隷のようにこき使われており、父の王の命令で男の子が川に捨てられたことを知っていたと推察できます。また「ふびんに思い」とは、苦しみを共有する(have compassion)という意味です。彼女は、王女として、父から役に立たない娘と見られている我が身と重ね合わせて、親から捨てられたこの赤ん坊を受けとめ、結ばれる絆を感じとって、思わず手を差しのべたのではないかと日高先生は解説しています。

「王女は彼をモーセと名付けて言った。『水の中からわたしが引き上げた(マーシャー)のですから。』」(10節)。この子は川に漂う無力な赤ん坊でした。ただ無意味に死を待つだけの運命でした。王女自身も、たとえ王宮に身を置くとはいえ、この赤ん坊と同じ様に、無力に漂い、無意味に死を待つだけの運命でした。しかし赤ん坊を川から引き上げ、その命を慈しみ養うことによって、彼女は自分自身の命の役割と価値を見出して、生きる喜びを持つことが出来たのでした。彼女が水の中から引き上げた赤ん坊によって、彼女自身もまた、無意味な命から引き上げられたのです。人の絆とは、このように互いに命を与え合う不思議な絆なのですね。

## [結] 万事を益としてくださる神

私たちは、ヨセフ物語を通して、神さまが多くの民の命を救うために、人間の犯す悪をも善に変え

て、歴史を導いて下さっているお方であることを学びました。兄たちの妬み憎しみが、ヨセフをエジプトに導きました。侍従長の妻の不貞が、ヨセフに獄中生活を送らせ、人格を育ててエジプト国王と結びつけました。ヨセフは与えられた任務を見事に果たして、大飢饉のさなかに国王の権威を確立させ、ヤコブ一族をカナンからエジプトに移住させて、アブラハムへの神の約束通りの強大な民族へと成長させました。ヨセフは歴史に働き、また自分の内に働いて下さる神さまに、いつも目を注いで生き抜いたのです。

今日の箇所からは、エジプト王朝の交代からイスラエル人が弾圧される中で、川に捨てられた赤ん坊が王女に拾われて、エジプトの王宮で育つ不思議なドラマを学びました。このドラマで神に用いられた人は、モーセを生んだ母、川に捨てられた子を拾った王女、彼女に赤ん坊の母を乳母として引き合わせた姉と、皆女性です。

彼女たちはそれぞれの役割を精一杯に果たしました。母親はぎりぎりまで手許で乳を飲ませて育てました。パピルスの籠に丹念に防水加工してナイル河畔の葦の茂みに置きました。姉は遠くから見張り続け、王女に拾われると、すぐさま母を乳母として紹介しています。そして王女は我が身と重ね合わせてこの赤ん坊に手を差しのべ、父の国王の命令に逆らう決断をしました。

使徒パウロは「神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています」(ローマ 8:28)と言っています。まさに神さまが万事を益となるように、共に働かせてくださって、救いがもたらされていくのです。それにしても、大勢いる王女のなかで、特別な事情を抱えているこの王女が籠の置かれた川岸に水浴びに来るとは、何と不思議なドラマでしょうか。神さまの御業は、私たちの思いを超えています。

ですから私たちは簡単に絶望してはなりません。自分の最善を尽くして、神さまにお委ねし、不思議なドラマを信じて待ちましょう。神のなされることは、皆その時にかなって美しいのです。

完